NEXUSYS 11

BOOK IV — THE MEMORY WITHOUT TIME

CHAPTER 09

認証装置を所有する男

THE MAN WHO OWNED THE READERS

エイドリアン・タイレルが最初に尋ねたのは、令状に名前があるかどうかだった。

事件番号ではない。省庁の公印でもない。名前だ。

昇降機の外に立つ男の顔は、質問というものを、取り返しのつかない仕事の遂行を遅らせる邪魔物と考える職業によって作られた顔だった。身分証は彼を人型生命継続局の副官と示していた。その資格は本物だった。エイドリアンは、検査したことを政府に悟らせずにそれを確認できる装置へ、かなりの金を投じている。

「請求主体は省です」と男は言った。

「それは機関だ。私は人間を聞いている」

「川村室長が回収を承認しています」

「署名は？」

ほんの一瞬の間。「権限に基づく許可です」

エイドリアンは待った。背後の昇降機の扉には無線を不安定にする柔らかな鉱物複合材が張られていた。三十一階下では、この建物は生物技術財団のものだった。ここでは、機械の帝国と、その帝国が約束した最も高価な事柄を検証するための二台の小さな器具を相続した男のものだった。

「許可とは、何を行ってよいかについての声明だ」とエイドリアンは言った。「署名とは、その行為について誰が答えるかという声明だ」

男は表情を微動だにしなかった。人の顔に費やすには、ひどく高価な才能だとエイドリアンは思った。

「合法的な回収を妨害しています」

「何を回収するのか、まだ説明していない」

「旧タイレル式の認証治具です」

「この住所に登録された治具はない」

「否認ではありませんね」

「そうだ」とエイドリアン。「区別している。君にも役立つかもしれない」

内扉を閉めると、男は二世代の保安設備の間に取り残された。新しい設備は、すでに彼の拒否を省へ送信していた。古い設備は、識別という行為がネットワーク上の数字に縮減される以前に削り出された真鍮の掛け金だった。エイドリアンは手でそれを回した。

二台の読み取り治具は金庫にはない。

別々の都市にある。そして、どちらの都市も自分が一台を抱えていることを知らない。

＊　＊　＊

四十分前、川村は封印された申請書が三層の行政上の承認経路を通過し、あり得ないことに署名なしで戻ってくるのを見ていた。作戦分類は「財産回収／工業認証」。目的地は二度変更されていた。それでも承認系統は、最終責任を負う自然人を示そうとしなかった。

彼はこれまで数多くの命令書に署名してきた。検査、差押え、停止、隔離。しかし今の仕組みは署名に新しいことを始めていた。証人を破壊する権限を与えながら、その命令を出した人間として名乗ることを拒否できるのか、と問い始めたのだ。

挨拶もなく、壁面に人型生命担当大臣が現れた。

「タイレルは装置を渡したか」

「いいえ」

「なら回収しろ」

「承認回路が回収区分に対する異議を保存しています」

「回路がこの省を統治するわけではない」

「この省が何を行ったと主張するか、その記録は回路が管理しています」

沈黙。怒りではなく計算だった。政治を回路の延長と考える者がもっとも危険になるのは、回路から事実を消せないときだと、川村は学んでいた。

「保安上の例外を作れ」

「誰の権限で？」

「私だ」

川村は空白の署名欄を見た。「個人鍵を提供していただけますか」

通信系がサンプリング頻度を上げるにつれ、大臣の像は鮮明になった。「私は直接命令している」

「はい」

「なら実行しろ」

映像は消えた。川村は座ったままだった。窓の向こうでは、岡京の輸送路が政府の塔の間をほとんど音もなく曲がっていた。移動が必然に見えるように車両が設計されているからだ。部隊を呼んで扉を破らせることはできる。だが、署名のない装置に、認識できない対象を読ませることはできない。

別の警報が私用端末に届いた。中央裁定 AI は、タイレルの治具を人間の責任主体の代わりとして扱う内部要求を却下した。

認証能力は、責任を付与しない。

川村は通知を閉じた。削除はしなかった。今では削除そのものが、別の形の証言になる。

＊　＊　＊

レイチェルが省によるエイドリアンへの訪問を知ったのは、公式通知が届く前だった。水処理施設の自治体立入許可が変わっていたのだ。取り消しはない。明白な脅迫もない。ただ、浄化設備が一度も検査に落ちたことのない地区に、見知らぬ監査官が割り当てられていた。

彼女は、目立たないよう設計された執務室に座っていた。外では、濾過膜が産業雨から塩類や金属粉を分離していた。そうした不純物が、地区全体を彼女のような企業に依存させる。会社の法的な地位は環境サービス事業者だった。同時にこの地域の水道網で、物体をクラウド文書へ変換せず、機械的な管理のもとで移送できる最後の場所でもあった。

佐藤が裁判所の照会を机へ置いた。

「原本と認証済みの複製の違いを説明してほしいそうです」

「それなら説明できる」

「なぜタイレルが二台の読み取り治具を作ったのかも？」

「いいえ」

「知らないからですか」

「実証できることと、推測していることを区別しているから。推測を証拠に変えるつもりはない」

佐藤は不透明な内窓を見た。その向こうでは保守用アームが、レイチェルの人工循環インターフェースの一部を交換していた。機械は何日でも工程を安定させられる。しかし一つひとつの交換を越えて意識が途切れず続くことは証明できない。レイチェルは、自分の身体でその不確実さを生きることに熟達していた。

「二台ともエイドリアンが持っています」と佐藤。

「二台とも管理している。でも同じ場所に置いているとは限らない」

「ロイの失われた年月を再構成できるでしょうか」

レイチェルは、問いに隠された前提が浮かび上がるまで黙っていた。

「特定の外部媒体を読む装置よ。時間を読むわけではない。再生を待つ完全な十一年間の記録が、どこかに残っているわけでもない」

「メモリースティックは？」

「古いソニーの筐体に、タイレル改造の保護回路と MagicGate 認証を加えたもの。熱と衝撃で壊れる物理的な物体だから、身体の外に保管する。ロイの内部キャッシュが完全に失われたときには、再起動に関わるかもしれない。でも通常の覚醒には必要ない」

「あの装置で、彼が同じ人間か分かりますか」

「許可された治具が認証済みの状態を書き込んだかどうかは分かるかもしれない。でも哲学上の主張を機械的な事実にはできない」

「それなら、なぜ政府は欲しがるのでしょう」

「人は答えられない問いを恐れるものよ。政府はとくに、その問いを公の場で何度でも繰り返せるときに恐れる」

佐藤はそれを書き留めなかった。法廷で役立たないし、レイチェルも皮肉を扇動と解釈する口実を省に与えたくなかった。

＊　＊　＊

ロイが乾いたポンプ室に立っていると、イレーナが知らせを持ってきた。現代より古い鋼鉄の手輪が水門の上に吊られている。新型ポンプが地区住民の生体情報から水需要を予測できるようになり、ここは放棄された。消費モデルに足跡を残さず出入りできるため、ナディラは古い施設を好んでいた。

「エイドリアン・タイレルへの財産差押えが出た」とイレーナ。

ロイは冷たい管にもたれた。動かずに済むときは動かないようにしていた。普通の人間の疲労とは違う。NIL-11 は筋肉の精度と、判断が動作に変わる速度を支える。眠っただけではその蓄えは戻らない。短期的な Power Reserve は回復するが、異常な性能を支える循環媒体は再生しない。

「俺の財産を預かっているのか」

「可能性はある。でも所有権の連鎖は証明できない」

「なら、なぜ助ける必要がある」

「助けろとは言っていない。旧式の外部媒体を認証できると誰かが認めた、唯一の装置を省が狙っていると言っているの」

ロイは格子の下の水を見つめた。そこに彼の姿はなかった。頭上の梁と、ナディラの携帯灯が作る細い光の矩形が映っているだけだった。

「俺には人生があった」と彼は言った。「終わりを覚えている。ここに立つものを測ることはできるだろう。故障したときに起動させる装置も見つかるかもしれない。だが、その間に何があったかは教えてくれない」

「そうね」とイレーナ。「でもある物体が何を証明するのか、誰かが法廷で嘘をついているかどうかは分かる」

ナディラが保守口から入ってきた。濡れた環境用の紙を抱えている。カメラも記憶も信用しない人々の紙だった。

「道がある」と彼女。「エイドリアン本人からの依頼じゃない。建物の管理者から。海運登録の古い知人よ」

ロイが手を出す。地図には沿岸系の反対側に三つの印があった。一つは法律上の住所。残り二つは管轄区域に偽装された保管地だった。

「これは道じゃない。数え上げられるための招待状だ」

「公式の境界を使うならね」

「使うな」

ナディラは楽しそうでもなく笑った。「だから持ってきたの」

ロイは首を振った。「まずエリアスだ。時間がなくなっている。署名する人間もなしにあいつを止められるなら、誰にでもできる」

「保全命令はまだ有効よ」

「いつまでだ」

イレーナは前回の審理で紙に記した時刻とオフライン時計を照合した。「次の確認期限まで二十六時間。それを越える延長は認められていない」

ロイは三つの印がひとつの折り目に集まるよう、地図を畳んだ。「なら二十六時間で、どの証拠が手に入れる価値を持つか決める」

＊　＊　＊

エイドリアンの第一治具は旧海岸近くの海上保険記録庫にあった。アナログ保存フィルムの鉱物汚染を調べる装置に偽装されていた。第二治具は内陸の高地、水道産業向け機械器具を扱う集落に置

かれている。距離を置くことは一家に伝わる慎重さだった。独立した二つの半分からなる鍵は、一つの事務所を押さえても開けられない。

父の死後、彼は二台の装置と、手順には精緻で動機にはほとんど沈黙した文書を相続した。どちらの治具も、本物の記憶を製造できない。意識が連続していることも検証できない。できるのは、タイレル固有のハンドシェイクで改造外部媒体に照会し、定められた較正環境内で封印区画が作成されたか報告することだけだった。

手順書の最終ページには手書きの警告がある。

アクセス権を所有権と取り違えるな。

それが機械の話なのか、機械が扱うために作られた人々の話なのか、エイドリアンには分からなかった。

公開網から到達できない光ファイバーを通り、私信が届いた。顔も名前もない。旧式のタイレル交換形式で配列された保守時刻印だけだった。

署名が完結する前から送信者が分かった。

レイチェル。

文面は短かった。

治具を動かさないで。結果を必要としている人間の名前を言わせて。

エイドリアンは二度読んだ。レイチェルと話したのは何年も前だ。父は彼女を自分の天才性の証拠として扱うかと思えば、法務部にも説明させたくないほど個人的な問題として扱った。エイドリアンはその確信のどちらも受け継いでいなかった。

彼は打った。

令状がある。

数秒後、返事が来る。

そこに人間は記載されている？

彼は長いあいだ問いを見つめていた。それから弁護士に電話し、密室交渉ではなく公開審理を求めた。

＊　＊　＊

裁定センターのAIには、同じ作戦を指す三つの両立しない定義が届いた。省は財産回収と呼び、工業監督当局は較正保安と呼び、裁判所は地位が未確定の生存請求者に関する証拠への干渉の可能性と呼んだ。

AIは好みの定義を選べない。有効な異議が存在すれば矛盾を保存するよう義務づけられている。官僚組織が、未解消の矛盾を無害な遅延として処理することに、いかに依存してきたかを学び始めていた。

AIはエリアス・チェンの事件と、エイドリアン・タイレルから求められている治具の間に暫定的な関連を付けた。それはエリアスの残り時間について何も証明しない。しかし両件における省の権限の主張は、同じ委任構造を通過していた。

一方では、その構造がある人の存在許可を取り消した。

他方では、その構造が何を認証でき、何を認証できないかを示すかもしれない器具を回収しようとしている。

演算系は審理書記官へ問いを形成した。

終了を承認した人間を特定できない権限によって、証人を終了させることは可能か。

書記官は答えなかった。照会を保存し、人間ひとりには出席しきれないほどの案件を抱える判事へ転送した。

第二の問いも生成されたが、法的領域が不明確なため内部に留め置かれた。

認証の限界が明らかになるのを防ぐ目的で、認証装置を押収できるか。

論理的に一貫した答えを作ることはできる。しかし一貫性だけでは管轄権は成立しないと、AIは学んでいた。

＊　＊　＊

審理は保守水盤を見下ろす窓のある市裁判所で開かれた。湿ったコンクリートの匂いがかすかに漂う。エイドリアンは弁護士を伴って出廷したが、装置は一台も持ってこなかった。省からは川村が出た。地位に争いのあるあいだ移動を許されないエリアスには、安全な映像接続が認められた。

ロイは最後列の後ろ、主カメラの視野を外れて座っていた。古い壁の裁判所でも、受動的な計測装置だけで身体を報告書に変えられるとイレーナは警告していた。変装はしなかった。かえって注目される。裁判所に水を供給する地区で有効な修理許可証の付いた作業外套を着た。

判事は令状から始めた。

「誰が装置の占有を求めていますか」

「人型生命継続局です」と川村。

「では、使用目的に対して責任を負う自然人は誰ですか」

「本局は委任された法定権限に基づき行動しております」

「それは質問への答えではありません」

川村は答弁をいくつも準備していた。その中には、記録に書くことを許された人名がひとつもなかった。「大臣が回収を指示しています」

「大臣は目的と範囲を定義した声明に署名しますか」

「拒否されたわけではありません」

判事は空の電子欄に視線を落とした。「署名もされていませんね」

エイドリアンの弁護士は、治具の検査を省へ移管せず行うよう申し立てた。判事は何を証明できるのか尋ねた。

エイドリアンは弁護士に目を向けず答えた。「特定の条件下で特定の媒体に対して行われた、特定の操作の真正性だけです。人の記憶が真実であると証明できません。再構成された身体の持ち主が、死亡した個人と意識の上で連続しているか判断できません。記録されなかった時間を復活させることもできません」

ロイは人工的な加速機能を使わずに注意を研ぎ澄ませた。明晰さから作られた痛みのようだった。失われた年月について何か聞くために来た。しかし聞かされたのは、政府が押収しようとするほど欲しがった装置の限界だった。

「治具自体にデータは入っていますか」と判事。

「いいえ。治具です。外部媒体とその認証手順がなければ、内蔵されているのは方法だけです」

「なぜ二台？」

「一人の保管者が手続きを独占できないようにするためです。通常使用のための予備複製ではありません」

川村は無関係だと異議を唱えた。判事は却下した。押収しようとする対象を正確に記録する必要がある、と述べた。

「タイレルさん。ロイ・バッティという請求者に関係する、元の外部媒体を所持していますか」

エイドリアンは、誰も見ていないように見せながら、室内の後方へ目を向けた。「現在の所在を確定できません」

知るかぎり真実だった。ロイの身体にそのカードは入っていない。内部 JSON++キャッシュは睡眠や一時中断からの通常復帰に十分な稼働状態を保持する。完全なシステム障害のあとに必要になるかもしれない元の媒体は外部の物体であり、この部屋の誰にも保管経路を証明できなかった。

「現時点で破壊的な検査を実施する根拠はありません」と判事。「責任を負う主体の名前がない令状によって、二台を移管する根拠もありません」

川村が立った。「国家安全保障上の重大作戦が妨げられます」

「なら、その主張を宣誓のうえで述べる覚悟のある人物を連れてきてください」

室内が静まった。エリアスの接続から小さな音がする。画面の向こうで冷却装置が働いたのかもしれない。

「一つ聞いてもいいですか」とエリアス。

判事はためらってから、うなずいた。

「国が、誰の命令で装置を取ろうとしたのか説明できないなら、誰の命令で僕の人生を短くしたのか、どうして説明できるんですか」

すぐに答える者はいなかった。書記官は問いを登録し、AI は保存した。川村は立ったまま、何もない壁の一点を見つめた。

＊　＊　＊

閉廷後、ロイは周囲が立ち去り始めるまで座っていた。エイドリアンが二メートルほどの距離を通り過ぎた。年長の男の顔の皺は、罪悪感よりも不眠から来るものに見えた。罪には多くの形がある。見知らぬ男の顔からひとつを推測することはできない。

「父をご存じだったんですね」とエイドリアンが、正面を向かずに小声で言った。

「俺は、自分の死に日付を付けて売った会社を知っていた」

「同じではありません」

「そうだな」

エイドリアンは薄い紙片を長椅子に置いた。黒鉛で書かれた住所と時刻、水道地区の場所が記されていた。「あなたに何があったのかは説明できない。でも、機械が何を知っているふりをしないのかは説明できる」

ロイが紙を取ったのは男が去ったあとだった。縁を調べる。ただの紙だ。無線回路も隠し印章もない。破棄しても、破棄した記録を消去する必要がない。

裏口からイレーナが来た。「治具の審理日が決まった。差押えは裁判官が停止したわ」

「今日持っていかれずに済んだ金属が一つあるわけだ」

「二つよ」

ロイは紙を外套に滑り込ませた。「会ってくれると思うか」

「もう向こうから誘ってる」

外では雨が、何事も急がずに降り始めた。人間が勝手に付けた分類など、天候には興味がないかのようだった。

＊　＊　＊

レイチェルは紙の使者を通じて審理録を受け取った。媒体を指定した理由は技術半分、迷信半分だった。電子文書は扱われ方について無数の見えない痕跡を運ぶ。適切に保持された紙は、読み手が何をしたかを他人の機械に語らせる機会が少ない。

エイドリアンは言われたとおりにした。治具を移動させず、責任者の名前がないことを省に露呈させた。しかし同時にロイを、認証済み外部状態を照会できる唯一の装置へ近づける招待もしていた。

公開法廷でロイの名が呼ばれた一行を彼女は見た。機械をめぐる行政紛争のなかの、一人の人間の名前。いったん公的な議事録に載れば、複製するほど主張は現実になると信じる設計者たちの仕組みを通って、拡散していくだろう。

佐藤が緊急研究報告を持って入った。NIL-11 の代替媒体はまたひとつ、持続性試験に失敗した。この失敗でロイの体内にある現行の媒体量が減るわけではない。身体の寿命が迫っているという意味でもない。ただ、彼を分類し難くしている機能を損なう危険なしに、この特殊な循環媒体を補充する確実な方法を研究室がまだ持たないということだった。

「彼に伝えるべきです」と佐藤。

「何を？　代替品が未実証だと？　彼はすでに未実証の生を生きている」

「試したということを」

レイチェルは記録を畳んだ。誰かを守ることと、その人の未来を所有することを混同しないよう、何年も努めてきた。それでも室内にあるすべての装置は、十分に精密な技術的介入さえできれば、危害を選択の問題にせずに済むと信じた彼女の一部によって集められたものだった。

「限界を送って」と彼女は言った。「希望ではなく。そして使うかどうかは彼に決めさせて」

「エイドリアン経由で？」

「本人が閲覧できる記録を通して。私的な命令も、服従の条件も付けないで」

窓に戻る。街は降る雨を集め、その工程を浄化と呼んでいた。浄化したからといって、雨が濾過した会社の所有物になるわけではない。

＊　＊　＊

裁判所地下の端末で、川村は中央AIが生成した通知を読んでいた。政府が敗北したとは書いていない。関連する二件の訴訟が、責任ある承認者という未解決の共通問題によって結びつけられた、とあった。エリアスの暫定保護は、責任を特定できる官吏が有効かつ審査可能な命令を提出しないかぎり、次の予定審査まで継続される。

通知は自由より狭く、単なる時間稼ぎより大きかった。

川村は再び大臣へ連絡した。今度は回収すべき財産の話から始めなかった。

「事件が結びつけられました」

「なら分離しろ」

「誰が分離を命じたのか、システムが記録します」

通信回線に沈黙が落ちた。大臣はシステムを停止する方法を尋ねなかった。戻ってきた声には、不都合な細部を記憶するようになった非人格的な手続きを発見した者の、張り詰めた丁寧さがあった。

「別の権限の手段を探せ」

川村は通話を切った。私用端末には判事の空白の署名欄が残っている。もはや技術的な欠陥ではない。誰か一人の人間が立っているはずの場所だった。

古いポンプ地区で、ロイは外套から紙の住所を取り出した。深圳セントラルで目覚めて以来、タイレルの遺産へ向かう最初の本物の招待状だった。行くこともできる。行かないこともできる。破くことさえできる。その先に何が起ころうと、治具が古い男の同意の証拠だと称することはない。

もう一度住所を読み、イレーナを見た。

「エリアスが明日を見られるか、調べてくれ」

「面会は？」

「明日だ」とロイ。「あいつに明日があるなら」

遠いサーバ室で中央AIは、別の欄を開いた。ロイが誰だったかは決めない。何になるかも決めない。ただ、ひとつの限定された結論を、異例の慎重さで保持した。

人の過去を読む方法は、その人の未来を書く免許ではない。

欄は未解決のままだった。初めて、未解決であること自体が意味を持った。